



日本音楽教育学会ニュースレター

目 次

1 報告・お知らせ	
平成17年度総会議事録	2
平成17年度第2回理事会報告	4
国際交流委員会からのお知らせ	7
2 全国大会・ゼミナールのご案内	
第36回全国（沖縄）大会報告	8
第8回音楽教育（妙高）ゼミナール報告	9
3 海外トピックス	
国際ワールドミュージック合唱フェスティバル	
第5回 Festival 500（カナダ）	11
動き始めた中国の音楽教育研究	13
第1回カミュカンカンファレンス	14
4 国内トピックス	
2005日韓友情記念公演	16
仙台市立南材木町小学校	
「音楽教育自主公開研究会」報告	17
5 会員の窓	
音楽授業削減問題によせて	19
編集後記	21

平成 17 年度総会 議事録

日時：平成 17 年 10 月 29 日（土）16：45～17：30

場所：琉球大学法文学部新棟 215 教室

開会に先立ち、小山事務局長より定足数（会員総数の 5 分の 1）に達することが確認され、規定により総会が成立した。

会員総数 1573 名 出席 74 名 委任状 269 名

1. 開会の辞（小山事務局長）

2. 挨拶（坪能会長）

3. 議長選出

北山敦康氏（静岡大学）が選出された。

4. 報告

1) 会務報告（小山事務局長）

以下の通り、昨年度武蔵野音大での大会以降の会務が報告された。ほぼ例年通りだが、今年度から新しく「学会誌検討委員会」「学会運営検討委員会」が立ち上げられたとの報告があった。なお、2006 年 6 月末までの会務はすでにニュースレターに掲載されており、ここでは省略した。

7 月 10 日	17 年度第 2 回常任理事会 (日本女子大学)
8 月 27 日	17 年度第 2 回編集委員会 (埼玉大学東京カレッジ)
28 日	第 2 回学会運営検討委員会 (静岡大学)
30 日	音楽教育実践ジャーナル Vol. 3 no.1 ニュースレターNo. 21 発送
9 月 9 日～11 日	第 8 回音楽教育ゼミナール 2005 (妙高ゼミナール)
10 月 28 日	第 3 回常任理事会 (沖縄県女性総合センターているる) 第 2 回理事会 (沖縄県女性総合センターているる) 第 3 回編集委員会 (沖縄県女性総合センターているる)

2) 妙高ゼミナール報告（小川昌文ゼミナール事務局長）

9 月 9 日～11 日、妙高のホテル「大丸」にて第 8 回音楽教育ゼミナールが行われた。メイン・テーマは「音楽教育の実践と研究の新たな展望」。基調講演には、インディアナ大学の Jorgensen 氏と南フロリダ大学の Fung 氏をお迎えした。予想を上回る約 200 名の参加者があった。現在、報告書を作成中。

3) 各委員会報告

・編集委員会報告（木村編集委員長）

第 3 回委員会の概要と発行予定の報告がなされた。『音楽教育学』第 35 巻第 2 号は 12 月 25 日発行予定。2006 年 3 月中に発行予定の『音楽教育実践ジャーナル』第 3 巻 2 号原稿締

切は12月15日。特集テーマは「学校生活を支える音楽の課外活動（仮題）」。

- ・文献目録委員会（今川常任理事）
『音楽文献目録』最新版が完成した。

5. 協議事項

1) 平成16年度会計報告・監査報告

- ・平成16年度会計報告（杉江会計担当）
大会プログラム p 85, 86 をもとに報告が行われた。

・監査報告（宮野会計監事）

岩崎会計監事とともに監査を行い、会計報告に相違ないことが報告された後、会計報告が承認された。

2) 平成18年度事業計画および予算

- ・平成18年度事業計画（小山事務局長）
下記事業計画が示され、承認された。

平成18年度事業計画

平成18年	
4月20日	共同企画申し込み締切
5月中旬	平成17年度会計監査 平成18年度第1回編集委員会 平成18年度第1回常任理事会・理事会
6月20日	研究発表（口述）申し込み締切
下旬	『音楽教育学』第36-1号発行・ニュースレターNo.24
7月上旬	平成18年度第2回編集委員会 平成18年度第2回常任理事会 研究発表受理通知
8月下旬	『音楽教育実践ジャーナル』Vol.4.No.1発行・ ニュースレターNo.25 夏期ワークショップ
	※ 第3回編集委員会 第3回常任理事会・第2回理事会 第37回大会 会場：千葉大学
12月中旬	『音楽教育学』第36-2号発行・ニュースレターNo.26
平成19年	
2月初旬	平成18年度第4回編集委員会
3月末日	『音楽教育実践ジャーナル』Vol.4no.2 発行・ ニュースレターNo.27 平成18年度会計決算
	(※ 月日は未定)

・平成 18 年度予算（奥会計担当常任理事）

大会プログラム p 87 をもとに説明がなされた。吉田孝会員（弘前大学）より『音楽教育実践ジャーナル』に印刷状態の状態が悪いものがあつたため、適正な予算配分を望む意見があつた。奥理事からは、その後印刷状態は改善されているとの回答があつた。予算は原案通り承認された。

3) 第 37 回大会について（宮野理事）

来年度大会は千葉大学で行われることになり、10月28, 29日の開催を予定している。

4) 第 38 回大会候補地について（坪能会長）

岐阜大学に依頼しており、前向きに検討中である。

5) 国際交流委員会について（坪能会長）

第 2 回理事会にて国際交流委員会の設立が承認された。メンバーは、奥 忍（岡山大）、田中健次（茨城大）、小川昌文（上越教育大）、塩原麻里（東京学芸大）、中地雅之（東京学芸大）。別紙資料、国際交流委員会規程（案）が承認されれば、明日委員会を発足させたい。国際交流委員会規程案の訂正（奥理事） 附則 1. の「10月28日」→「10月29日」 阪井恵会員より、第 2 条（1）の「資料、研究物の蒐集」について場所の問題を考慮すべきとの意見があつた。国際交流委員会規定案は、前記の訂正を含めて承認された。

6. 議長解任

7. 閉会挨拶（岩崎副会長）

平成 17 年度第 2 回理事会報告

日時：平成 17 年 10 月 28 日（金）15：30～18：00

場所：沖縄県女性総合センターているる

出席：井口・今川・岩井・岩崎・小川（昌）・小川（容）・奥 ・加藤・木村・熊木・小山

阪井・佐野・島崎・嶋田・坪能・寺田・降矢・南・宮野・村尾・安田・山本（五十音順）

欠席：篠原・田邊・山本・若尾

【報告事項】

1) 会務報告

資料に基づき、会務報告がなされた。（総会議事録参照）

2) 事務局アルバイトについて

中村幸子氏が、10月より週に1回木曜日に勤務することとなった。

3) 賛助会員について

ヤマハのアーティスト企画部門が賛助会員を退会し、代わりに同社学校教育部門が入会することになった。

4) 委員会報告

[1] 学会運営検討委員会

今後の学会のあり方についての答申内容について村尾委員長から説明があつた。今後継続審議する。

[2] 学会誌検討委員会

以下の6項目からなる委員会の答申案について審議した。

- (1) 編集委員の人数は現状維持とする
- (2) 音楽教育と音楽実践ジャーナルそれぞれについて分担をはかることが必要
- (3) 『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』の編集全体に編集委員会は責任をもつ
- (4) 編集事務に関わって若手研究者の登用は望ましくない
- (5) 『音楽教育実践ジャーナル』への投稿および査読のあり方については整理されていない
- (6) 学会誌の発行回数は現行どおりとする。また、『音楽教育実践ジャーナル』の査読指針を作成すること、および、学会誌の編集にかかる特集編集者負担の経費については10万円を上限に学会から支給することが認められた。

[3] 編集委員会

編集委員会の活動、および論文査読、発表のスケジュールが説明された。

- ・投稿原稿の検討状況について報告があった。

「音楽教育学（研究報告）」1件

「音楽教育実践ジャーナル（自由投稿）」2件

- ・9月末日で「音楽教育学」への新たな投稿が7件あったことの報告があった。

(現在査読中) * 次回の締め切りは平成18年1月27日(金)の予定

- ・「音楽教育実践ジャーナル（通巻6号および7号）」の進捗状況について報告があった。

[4] 音楽文献目録委員会

『音楽文献目録33』が刊行された。

- 5) 音楽文献目録委員の選出について委員の任期が平成17年度末で満了となる(任期2年)。18年度からの委員として、斎藤博氏(留任)、本多佐保美氏(留任)、山下薫子氏(新任)が了承された。
- 6) 妙高ゼミナール報告
小川昌文氏から、9月9日～11日に行われた妙高ゼミナールについて報告があった。8) 学会誌バックナンバーについて 学会誌バックナンバーをセットとして、先着12名に販売することとなった。
- 9) その他
教育学関連学会連絡協議会への参加申し込みをした(会費2000円)。また、日本学術会議協力学術研究団体への申し込みをした。

【協議事項】

- 1) 平成18年度事業計画
計画は資料にしたがって説明された。(総会議事録参照)
- 2) 第37回千葉大会について
次回37回大会は千葉大学で行われることが報告された。
- 3) 第38回全国大会候補地について
第38回大会は岐阜大学に依頼中であることが報告された。
- 4) 後援申請について
「韓国伝統遊び歌東京公演と青少年交流」の後援申請が承認された。
- 5) 理事・常任理事の大会時昼食の廃止について
理事、常任理事の開催時、および司会者の昼食廃止が了承された。

6) 参事制度の導入について

若手会員に学会運営への参加協力を仰ぐ参事制度を導入する方向で合意した。

7) 新入会員及び退会者の承認

新入会員：下記の 3289 番～3288 番までの 21 名を承認。

<正会員>

3289	鈴木 渉	山形大学
3290	奥村 直子	聖徳大学院生
3291	竹内 秀男	尚美学園大学
3292	小平 しおり	東京音楽大学院生
3293	舌古 有里	名古屋芸術大学院生
3294	内田 博美	ドイツ ミュンスター大学院生
3295	永原 恵三	お茶ノ水女子大学
3296	濱田 稔子	潮来市立津知小学校
3297	鈴木 美緒	Universität Würzburg 院生
3298	上田 衛	大阪市立瑞光中学校
3299	伊 利	千葉大学院生
3300	高比良 寿	福岡教育大学院生
3301	川村 祥子	東京文化短期大学
3302	長田 華子	横浜国立大学院生
3303	小林 玲子	信州大学院生
3304	石岡 正通	常磐会短期大学
3305	内川 澄俊	名古屋芸術大学院生
3306	本多 峰和	名古屋女子大学
3307	森田 満	兵庫教育大学院生
3308	稲月 明子	兵庫教育大学院生
3309	瀬戸口浩子	兵庫教育大学院生
3310	岩崎 理恵	兵庫教育大学院生

<申し出退会者>

0784	川口 恒子	金沢大学名誉教授
1220	菅野 久子	大阪音楽大学
1374	小林 苺子	鳴門教育大学
1520	太田 千津	東原中学校
1710	広岡 文子	I P T F
2831	岡崎 映子	台東区立大正小学校
3186	島津 幸子	

<ご逝去>

1354	當麻 崇子	秋草学園短期大学
2402	西野 耀子	愛知学泉女子短期大学

10月21日現在正会員数 1573 名

理事会・常任理事会開催予定

平成 17 年度第 4 回常任理事会 平成 18 年 2 月 19 日 (日) 14:00～ 日本女子大学

平成 18 年度第 1 回常任理事会・理事会 平成 18 年 5 月 14 日 (日) 14:00～ 東京学芸学大

国際交流委員会からのお知らせ

奥 忍 (岡山大学)

国際交流委員会が第36回大会の総会で誕生しました。奥忍委員長と小川昌文、塩原麻里、田中健次、中地雅之の各委員で運営します。第1回の委員会では、委員会の取り組みとして望ましい作業を列挙した上で、当面の方針として以下の活動をしていくことになりました。

- 1) 学会ホームページの英語版作成
- 2) 海外研究資料入手方法の紹介
- 3) 姉妹学会との交流の推進
- 4) 2006 ISME マレーシア大会グループツアーの実現
- 5) ISME 広報・宣伝

以下に上記活動の進捗状況について記します。

- 1) 現在塩原委員がホームページの英訳を進めています。公開までにはもう少し時間がかかると思いますが、学会の目的・活動、会長のご挨拶、など順次進めています。完成すれば、学会が海外との受信・発信のベースキャンプができます。
- 2) 小川委員の担当です。現在懸念されている「義務教育における音楽科削減」問題に関して『教育音楽』12月発行(1月号)に音楽が学校から閉め出されないことを訴えるためにアメリカの取組を紹介する記事が掲載されます。どうぞお読み下さい。

3) 姉妹学会である韓国音楽教育学会との交流の他、田中委員が主として韓国の諸学会との可能性を検討しました。社会の動向を見ながら進めたいと考えています。

4) 中地委員が旅行会社に打診中です。詳細は決まり次第学会のホームページに掲載など、別途通知します。ISMEは個人で参加するのでもいいですが、グループだと海外旅行にまつわる雑事が楽になります。また多くの催しの中からお薦めイベントを教え合ったり、などグループならではの楽しさがあります。

5) ISME 世界大会の魅力のひとつは、世界各国から集まる演奏団体が繰り広げるコンサートです。幼児から大人にいたるまで各国々における音楽教育事情を演奏を通してつぶさに知ることができます。マレーシア大会には日本からも4演奏団体が参加します。

- ・三戸誠氏 (ヴィオラ) と佐藤由里亜 (ピアノ) のデュオ
- ・福島コダーイ合唱団 (降矢美彌子氏)
- ・箏アンサンブル (安藤政輝氏)
- ・天理大学雅楽部 (佐藤浩司氏)

11月に締め切られた研究発表にも日本からの発表者が見込まれます。最新情報は

<http://www.isme.org> をご覧下さい。

(文責：奥 忍)

各種委員会報告

編集委員会からのお知らせ

編集委員会 委員長 木村次宏 (福岡教育大学)

現在、編集委員会では、学会誌検討委員会と連携を図りながら、「音楽教育実践ジャーナル」と「音楽教育学」の2つの学会誌の在り方等について検討しています。そこでは投稿原稿の種類、内容、審査基準をどのように整理すべきか、また特集の企画についてどのように特色を出すべきか、等々様々な課題について議論がなされています。

「音楽教育実践ジャーナル」の編集もようやく軌道に乗ってきたとはいえ、その作業は予想以上に大変で、学会事務局、印刷業者、編集担当者等の連携をさらに密にして進めていく必要があ

ります。また「音楽教育学」に関しても、投稿原稿の件数を増加させるべき手だてを講じるとともに、多彩な内容の企画等を検討し、ジャーナル同様、今まで以上に活性化させることが求められるところです。

編集委員会も、上記の課題改善に向けて時間をかけて取り組んでいます。不十分な点も多々あるかと思いますが、会員皆様方のご協力によって、より有用な学会誌を編集・作成して行きたいと考えています。どうぞ今後ともよろしくご協力申し上げます。

第36回全国(沖縄)大会報告

木村次宏(九州地区理事)



フォーラム・シンポジウム



組踊版「スイミー」

第36回全国(沖縄)大会は、2005年10月29日(土)・30(日)に琉球大学を会場とし、二百数十名の参加者を得て開催されました。本来であれば、4年前に第32回大会として開催されるはずの沖縄大会ではあったのですが、あの世界を震撼させた9.11関連の事件で、不本意にも大会直前で中止せざるを得ない事態となってしまいました。そのような経緯の中で、今回改めて沖縄で全国大会が開催され、成功裏に終えることができたことは、本当に心よりうれしく思います。これも大会運営に全力を注いでくださった沖縄地区の実行委員をはじめとして、本大会に関わっていただいたすべての方々の熱意の賜であると確信しています。

さて二日間の大会の内容ですが、両日の午前中は、個人または共同による研究発表が行われました。昨年度を上回る67件の発表があり、非常に多岐にわたる研究内容が紹介され、それぞれの会場において熱心な意見交換がなされました。

初日の午後は、大会実行委員企画によるフォー

ラム・シンポジウムが行われました。「地域性を生かした音楽教育を考える - オキナワの肝心を次世代へ」と題されたこの企画は、沖縄において地域に根ざした音楽教育を広く展開されている三名(入里叶男:沖縄市立北美小学校教諭・沖縄県三線教育研究会会長、平田大一:南島詩人・演出家・前きむたかホール館長、比嘉康春:沖縄県立芸術大学助教授・琉球古典音楽演奏家)をパネリストに迎え、その取り組みの現状及び今後の展望等についてお話ししていただきました。そこでは沖縄という地域の特性を生かした取り組みが紹介されましたが、どれもまさに沖縄の伝統芸能の根底に流れる“肝心(ちむぐる)”を感じることできるすばらしいものであると同時に、我々参加者に、地域コミュニティの中で学校教育(大学も含め)、社会教育の場における音楽教育が、お互いの役割を果たしながら、いかに有機的な連携を保持し、推進されるべきかということに関して、多大な示唆を与えてくれました。またエキジビションとして実演された比嘉氏指導による組踊版

「スイミー」も大変興味深く鑑賞することができました。

一日目のプログラム終了後には、懇親会が開かれ、そこでも意見交換等がなされるとともに、琉球大学の「琉球芸能研究クラブ」の皆さんや泉恵得先生による沖縄の歌や踊りが披露され、大いに盛り上がりました。そして最後はカチャーシ（沖縄民謡）を踊って“締め”という、とても楽しい一時でした。

二日目は、午前の研究発表に引き続いて、昼食の前に院生フォーラムが開かれ、各大学の院生が集まりお互いの研究について情報交換がなされました。また午後からは共同企画2件と常任理事会企画のプロジェクト研究2件が並行して行われました。哲学、多文化教育、評価、学力等をキーワードとしたこれらの企画は興味あるものばかりで、どの会場も時間いっぱいまで熱心に議論が交わされました。

また本大会では、両日にわたって、沖縄を代表する音楽教育家・作曲家である宮良長包氏のパネル展も開催され、関係者のご協力で貴重な資料等を拝見させていただくことができました。



以上、沖縄大会について簡単に報告させていただきましたが、最初にお話しさせていただくように、4年越しの思いや願いが込められた本大会は、どの部分をとっても、本当に充実した内容であったと思います。

最後になりましたが、本大会を開催するに当たりご尽力いただきました皆様方に厚くお礼申し上げます。

第8回音楽教育ゼミナール（妙高）報告

妙高ゼミナール実行委員長

伊野義博（新潟大学）



赤倉子ども太鼓



韓国音楽のワークショップ風景

9月9日（金）から11日（日）の3日間、新潟県妙高市赤倉温泉にて開催された第8回音楽教育ゼミナール「妙高ゼミナール」は、全国から200人を超す会員、音楽教育関係者の参加をいただき、大変内容の濃い充実した会となりました。

「音楽教育の実践と研究の新たな展望」をテーマとしたこの大会は、地元「赤倉子ども太鼓」の澁漉とした演奏を皮切りに、Estelle.R.Jorgensen氏（インディアナ大学）、

Victor Fung氏（南フロリダ大学）によるそれぞれ「音楽教育の哲学の本質」、「アジアにおける音楽教育の展望」と題した基調講演で始まりました。実行委員会としては、大会テーマにこだわり、以下のようなラウンドテーブル、ワークショップを設定しました。

- ・音楽科教員養成に果たす大学院教育の意義と役割
- ・私の実践・私の哲学・研究と実践の間で
- ・中越地震を乗り越えて～その時音楽教育が

たした役割～

- ・佐渡鬼太鼓体験！！
- ・今外国ではどんな教育が行われているか
- ・音楽教師しゃべり場 90分！

これらのテーマには、教育現場からのたくさんの参加・交流、震災を乗り越えた新潟から学ぶといったメッセージも含まれています。

また、全国の会員からは、次のような興味ある企画が多数寄せられました。

- ・<素材>木とのふれあいをとおして育む鑑賞の力～「音楽」「生活科」「総合的な学習の時間」の関連性を重視した試み～
- ・子どもの声は「本当に」低くなっているのか
- ・日本の音楽を教える前に～音楽学からのメッセージ～
- ・韓国の音楽教育の歴史が日本の音楽教育の歴史に語りかけるもの
- ・日本の楽器・音具を用いた授業実践
- ・コンクールと音楽科教育の関わり
- ・どう育てるか、保育者の声
- ・うたについて
- ・義太夫節を語ってみよう～あなたも“語り物”音楽にハマりましょう<稽古体験と授業実践の検討>～
- ・韓国音楽プンムル（農楽）ワークショップ
- ・「音楽ゲーム」再考、そして体験！

- ・誰でも楽しめるボディパーカッション
- ・オカリナを吹こう

大会会場は、「赤倉温泉ホテル大丸」，「妙高高原メッセ」を主として、内容により「赤倉体育センター」，「野外劇場」といった施設を適宜活用いたしました。また、レセプションでは、佐渡の春日鬼組の皆さんから、鬼太鼓を披露していただき、参加者はともに越後・佐渡の音の世界を堪能することができました。

大会最終日は、「音楽教育の研究と実践の新たな展望」と題したパネルディスカッションを行い、三日間を総括しすべての日程を終えています。

ゼミナールの全体並びに詳細につきましては、今後報告書の発行を予定していますので、ご覧いただければ幸いです。なお、発行は3月末日を目指しています。当初の予定より遅れていることをお詫びいたします。

今回の開催につきましては、学会員はもとより、新潟県教育委員会、長野県教育委員会、石川県教育委員会、新潟県音楽教育研究会、長野県音楽教育学会、妙高市教育委員会、上越市教育委員会、上越音楽教育研究会よりご後援をいただきました。おかげで、地元の音楽の先生がたくさん参加してくださいました。ご協力いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。

海外トピックス

1) 国際ワールドミュージック合唱フェスティバル 第5回 Festival 500 (カナダ) リポート —多文化合唱を愛するニューファウンドランドの人々—

降矢美彌子 (宮城教育大学)



ニューファウンドランド・シンフォニー・ユース・クワイア Festival500 創始者スーザン・ナイトと筆者

Festival 500 は、2年に1度、カナダのニューファウンドランド州セント・ジョン市などで開催されるワールドミュージックの歌と合唱の国際フェスティバルである。フェスティバルは、シンポジウム（研究発表、セッション、モデル演奏）と、フェスティバル（ワールド・ミュージック・シリーズと題される演奏会とワークショップ）で構成されている。2005年に開催された第5回 Festival 500 のテーマは Sharing the Voices（声々の共有）、6月30日から7月3日が国際シンポジウム、7月3日から10日が、国際合唱フェスティバルであった。

Festival 500 は、1997年、カナダ発祥の地とされる、ニューファウンドランド500年を記念して、ニューファウンドランド・シンフォニー・ユース・クワイアの常任指揮者スーザン・ナイトによって設立された。Festival 500 は、スーザンとカイ・アダムの他2名の芸術監督と彼らを含む9名の運営委員によって運営されている。常任ディレクター、ピーター・ガーディナーらは、フェスティバル後、ニューファウンドランドからユース・オーケストラと合唱団を伴って広島を訪れ、エリザベト音楽大学のセシリアホールで、カナダの平和教育プロジェクトとして取り組まれたマリー・シェーファーによる「挽歌」（管弦楽曲（合唱、語り付）の日本初

演を行った。この作品に、シェーファーは、原爆への反戦と抗議をこめたという。

ニューファウンドランド・シンフォニー・ユース・クワイアは、メンバー総勢220名（2005年7月）、7歳から18歳の子どもたちによる多文化合唱団で、近年は数々の国際合唱コンクールに優勝し、オーストラリア、スペイン、ブラジルなど各地で演奏を繰り広げている。フィンランドのエリッキ・ポヒョラの指導のもとタピオラ合唱団の伝統を受け継いでいて、民謡を歌い踊り、楽器を演奏し、クラシックの古典的なレパートリーを歌い、マリー・シェーファー、ステファン・ハットフィールド等、カナダの作曲家に積極的に作品を委嘱して、新しい合唱作品を世に送り出している。子どもの自主性を重んじ、合唱のみならず広く文化全般を通して子どもたちの人間的な成長を図るスーザンの指導力には、定評がある。スーザンは、多文化合唱を文化の育まれた地に赴き、現地の優れた指導者から直接学ぶことをモットーにしている。この合唱団の特筆すべき魅力は、ア・カペラのユニゾンの美しさであろう。フェスティバル初日の演奏会では、アイルランド民謡を、数分間、指揮者なしのユニゾンで歌い、その美しさは合唱の真骨頂と感じられた。

Festival 500 では、毎回特定の地域の音楽がフィーチャーされる。2003年は、アフリカ音楽、

2005年は、南米音楽であった。ヴェネゼーラから、指揮者のMaria GuinandやAlberto Crau、混声合唱団Schola Cantorum de CaracasやパーカッショニストFreddy Mirandaが、アルゼンチンから、指揮者のAna Beatriz Fernandez de Brionesと女声合唱団Coro de Ninos y Jovenes Ars Novaが、プエルトリコから、混声合唱団Coro De Conciertoが、メキシコからLe Camerata De La Neuva Espanaが、また、ラテンアメリカ・ヴォーカル・アンサンブルDe Boca En Bocaも招聘され、弾むリズムやパワフルな音楽で聴衆を魅了した。特にAna Beatriz Fernandez de Brionesと女声合唱団Coro de Ninos y Jovenes Ars NovaはSalta, Argentinaの演奏の民族性と芸術性の高さには、心の底からの感動を覚えた。

2005年の第5回Festival 500には、世界の各地から50を超える合唱団が参加し、連日、ワークショップとコンサートでにぎわった。昼間は、8種を越えるワークショップ（参加者の便宜を図るため、毎日同じものが2回ずつ行われた）や、様々な場所での参加合唱団による市民のための無料コンサートが行われ、夜には、芸術文化センターや2つの教会で有料の世界ミュージックによるコンサートが行われた。Festival 500には、世界に名高い合唱指揮者、Maria Guinand（ヴェネゼーラ）、Alberto Crau（ヴェネゼーラ）、Tonu Kaljuste（エストニア）、他5名が、ワークショップやプレゼンターには、合唱指揮者Ana Beatriz Fernandez de Briones（アルゼンチン）、シンガー・ソングライターで指揮者のMelanie DeMore他14名が招聘され、非常に多彩で豪華な内容が盛り込まれていた。筆者も、日本やアジアの民俗音楽のワークショップを、毎日2回ずつ計8回行った。

日本からは、宮城県白石女子高等学校の合唱部（含卒業生）が参加し、アイヌや沖縄の民俗音楽を含む多文化音楽を披露し、特にコダーイ・

・ゾルターン作曲「山の夜」の演奏で絶賛を博した。また、被爆60周年を記念してこのフェスティバルのために、本間雅夫氏に委嘱した女声合唱「8月歌」の初演を行ったことは意義深いことであった。

私が、Festival 500について特に素晴らしいと感じたことは、このフェスティバルが、ニューファンドランド・シンフォニー・ユース・クワイアの地域に根ざした合唱運動と国際フェスティバルという二輪の活動として市民生活に根付いていること、スローライフを自認するニューファンドランドの人々の合唱好き（音楽好き）なこと、（大きなコンサートは、1年前からチケットが売り切れるほどで、有料にもかかわらず、どの会場も満員であった）、参加合唱団が、クラシックから、民謡、ゴスペル、ジャズというレパートリーをもつ多文化合唱団で、歌う楽しさに溢れていたこと、ワークショップは、子どもから大人まで参加自由で、子どもたちも音楽教育者になどにまじって、対等に楽しんでいたことの4点であった。その自由で自然な学びは、日本にも望まれる形であろう。

私は、今回初めてヴェネゼーラやアルゼンチンの合唱を聴き、その合唱指揮に触れることができたが、レベルの高さや音楽の喜びに溢れたものであることに驚嘆し、日本にももっと西洋に偏らない、世界の各地の合唱音楽が紹介される必要があることを実感した。今回は、2007年7月に開催される。是非、多くの方が参加されるとよいと感じている。

フェスティバルは、カナ政府やニューファンドランド州、カナダ航空やCBCラジオ局、多くのカンパに支援を受けて運営された。（姓名や合唱団の読み方の間違いのないよう、一部原語で記しましたが、フォント上表記に誤りがあることをお詫びいたします。）

2) 世界に向けて動き始めた中国の音楽教育研究

—上海, 北京レポート

村尾忠廣 (愛知教育大学)



中国音楽院のXie教授(中央筆者の左側)と音楽教育研究科の大学院学生

音楽教育研究の世界でも遅ればせながらアジアが急速に台頭し始めている。昨年は、台湾で開催された「国際音楽教育シンポジウム」の様相をレポートした。一言付け加えるなら、台湾における音楽教育研究は、韓国と実によく似ている。つまり、音楽教育研究者を目指す大学院学生のほとんどが女性であったこと、そして彼女たちが英語を駆使し、狭義の<リサーチ>をおこない始めている、ということである。7月シアトルで開催されたAPSMER 2005には台湾から若手研究者、学生が大挙して参加、発表をおこない、そのエネルギーに圧倒される思いがした。が、同じような現象は、今、中国本土でもおこりつつある。

今年(2005年)9月、中国音楽教育学会会長のXie教授の招きで上海と北京の大学で集中講義をおこなってきた。上海音楽院の方は「北京に行くならついでに」という感じで1日、2回だけの講演であったから、学生たちとじっくり話しあう時間はなかった。が、北京の中国音楽院では、文字通り、朝から晩までしっかり話しあうことができた。集中講義自体は中国語の通訳がついたが、非公式の討論会、パーティなどではみんな英語でどんどん質問してくる。Xie教授が北京には私(村尾)のファンクラブがある、と言っていたが、その冗談が本当に思えるくらい「熱烈歓迎」であった。彼ら(と言っても男子学生はマ・リー君一人で後はすべて女子学生)は、音楽教育の研究に強い関心を抱き始めている。集中講義では私自身のおこなっているAction Researchの事例にもっとも時間

を費やした。研究者(実践者)が実践者(研究者)として治療にあたる医者のように、Action Researchでは例えば、血圧、血糖値のような膨大な科学的基礎データを踏まえて実践にあたる。Action Researchといっても、単に行動実践する研究ではないのである。北京に立つ前、日本音楽教育学会「妙高ゼミナール」のシンポジウムの中で私は一つのAction Researchとして「Musical Dialect」(音楽における地域文化固有の訛りであるが、ジャズの個人様式にまで応用されつつある概念)を“Melodyne2.6”を使って自己教育した事例を発表した。これを上海、北京で講義したのである。ものすごいな、と思えるほど熱気に包まれた反響であった。講義の後は、院生たちとのフィリーディスカッション、そしてXie教授の自宅、レストランを借り切ったパーティ。つい数ヶ月前まで反日暴動があったとは信じられないような文字通り熱烈歓迎であった。パーティの席でもリサーチについての質問が続く。数年前、APSMER 2003香港大会でデビューした中国本土の若手研究者の研究は、そのほとんどが自国のカリキュラムの報告、宣伝でしかなかったが、目の前の学生たちは今熱く<リサーチ、音楽教育学>に思いを馳せている。これらの学生の中から次の時代の中国の音楽教育を担うリーダーが育ってゆくことだろう。3月には改めて余丹紅教授の招きで上海音楽院を訪問する予定となっている。世界に向けて動き始めた中国の音楽教育研究の今後の発展が楽しみである。

3) 第一回カミュカンファレンス 報告

2005 Conference on Music Learning and Teaching
CARMU (Center for Applied Research in Music Education)
at Oakland University

近藤真子 (オークランド大学)

「音楽を学ぶことと教えること、
一緒に考えよう」

11月10日～12日、アメリカミシガン州デトロイト郊外のオークランド大学で、CARMU (Center for Applied Research in Musical Understanding) 主宰による第一回カンファレンスが行われた。赤・黄・オレンジ等、色とりどりに色付けされた落ち葉の道を歩いて行くと、会場のメドールックホールがあった。秋晴れの最高に良いお天気である。このカンファレンスは、代表者であるジャッキー (Jackie Wiggins) が長年あたため続けてきた企画であり、“一緒に考えて行こう！ (Act and communicate together)” というのが彼女の一番の思いであった。要するに、発表者だけでなく参加者全員が主役のカンファレンスを目指したのである。世界各地からの参加者は考える仲間であり、未来をつくる仲間なのである。22人の発表者を含む100人弱の参加者全員が、三日間フルに語り合い、学び合い、将来のビジョンを出し合った。(日本からは西町インターナショナルスクールの、スティーブ (Steve Bizub) と私が発表。) まさに、Rogoff (1990) が言うところの、“コミュニケーションを通して、個々の考えを寄せ集めたレベルを遥かに越えた、もっと大きく深い全体像を浮かび上がらせる”のを体感したといえよう。

具体的にはどういうことかという、まず、全体での共通の理解があった。それは、“子どもが主体となる音楽教育”“学習は受け身的なものでなく能動的なもの”“音楽は構成要素を単独で扱うのではなく、全体表現として扱う”“人は人間どうしの関わり合いの中で学ぶ”と

いう暗黙の前提だ。次に、会場は一つ。すなわち、選択の余地はなく参加者全員が同じ研究発表を聞くことになる。これは意外に評判が良かった。まず、会場探しや移動の心配や手間がない。腹をくくってそのセッションをじっくり聞かれないのである。30分弱の発表、4、5コマが終わったところで、質疑応答、ディスカッションが行われた。全員が同じ研究発表を聞いている訳だから、話についていきやすい。比較や検討もなされ、自ずと内容の濃いものとなる。更に、類似したテーマを前後にもってくるというプログラムの工夫のお陰で、研究者間の視点や考えの比較、研究者同士の親密な意見交換の場が持てるという利点もある。結果的に、ディスカッションでは予想以上にかなり深いレベルでの考察がおこなわれた。そこでは、学生や実践教師にはじまり、研究者の卵からエキスパートまで、また、アメリカ音楽教育界で指導的立場にあるボードマン (Eunice Boardman) や ISME のボードメンバーでもあるノルウエーのエスペランド (Magne Espeland)、おなじみ ISME 会長のギャリー (Gary McPherson) オーストラリアのマーガレット (Margaret Barrett) イスラエルのエヴァ (Eva Barand) 等の蒼々たるメンバーの意見がことごとく飛び交う訳であるから凄い。私のような、まだ経験の浅い研究者にとっては、お涙ものである。緊張感の漂う貴重な体験であった。また、このディスカッションは、日を覆うごとに深く濃厚な内容になってきたことは言うまでもない。最後の方になるにつれ、参加者全員が家族 (親、子供、兄弟、孫…) のような雰囲気になってきたのは気のせいだったのであろうか？

例えば、初日は、アートを取り入れた音楽のカリキュラムモデル、グループ音楽づくり、音楽が分かる為の環境設定をテーマにしたような、発表がなされ、それぞれの質疑応答の後、発表内容の共通項目としてコラボレーションとコーポレーションの概念の違いについてのディスカッション、実践と理論との対比、比較検討に発展した。その後、哲学的見知からマーガレット (Margaret Barrett) が基調講演 (Children's Communities of Musical Practice: Musical Possibilities for Education Contexts) で、ソーシャルコンストラクティビスト達の考えを歴史と流れを踏まえながら話された。私の頭の中では、先ほどの研究発表とディスカッションの内容がすーっとまとまって行くような感じを覚えた。そして、音楽教育の実践で、いかに子供を取り巻く環境を意識することが必要であるかを皆が実感したに違いない。

二日目は、ローラ (Laura Ferguson)、デブ (Deborah Blair)、ベロニカ (Veronika Cohen) がそれぞれの鑑賞に関する研究の中で、Listening map を取り上げており、三者とも違ったタイプのマッピングを使用していることから、夫々の指導課程の違いに興味集中した。そこで、ディスカッションでは、マッピングの目的や意義、五感反応を使った鑑賞活動との相互関係等をはじめ、鑑賞に関するあらゆる視点からの意見交換が行われることとなった。このことは最終日のロブ (Rob Dunn) の発表で再び煮詰められたのである。また、同日、ジョン (John Kratus) とシャーロン (Sharon Davis) の、ガレージバンドの実践研究と、アレックス (Alex Ruthmann) のコンピューターを使った音楽づくり活動での生徒同士の関わりに関する実践研究発表後、ディスカッションでは、前日の共同音楽づくりやコラボレーションの話題が再検討され、最終日のサンディー (Sandy Stauffer) の発表で将来への指針が出されたような形になった。

おもしろかったのは、最終日にジャッキーが音楽ディメンション (Music dimension in Western Frame) を提示したことが、以外にも大きく波紋を呼んだことであつた。音楽そのものを見つめ直し音楽の諸要素を何とかマルチプルディメンションで表そうと試みたのである。ところが、音楽はディメンションでは表せないもっと入り組んだ複雑なものであるという意見や、音楽を受け入れる時、場所、場合によって変化する。あるいは受け取る側の年齢で変化する。音楽の種類で変化する。ディメンションは常に変動する等、いろいろな視点、立場からの激しい意見交換が行われた。私自身、”日本の音楽ではどんなディメンションがつくられるのだろうか？”などと、私なりのディメンションが頭の中で右往左往した。結局最後にはエスペランドが“今、音楽そのものについてもう一度見直す時がきているのかもしれない”と、今後の課題の一つを提示した形で、話し合いは一応中断された。最終日最後のディスカッションでは、それぞれの研究分野のエキスパート達から、教育哲学、美的価値、学習心理学等からの総合的・体系的な実践研究の重要性が再び言及され、これからの展望が示唆された。更に、学校音楽教育における音楽経験 (演奏・鑑賞・創造) は、近年の急速なテクノロジーの発展に伴う学習環境の変化を反映し、実践面でのす早い適応が求められると付け加えられた。

“音楽を学ぶこと教えることの本質をつかみ直し、これからの音楽教育をいっしょに考えて行こう” とする一人一人の思いから、白熱したカンファレンスへと発展していった三日間は興奮のうちに幕を閉じた。大会後、私の頭は、興奮の余韻でグルグルとまわり、かなり刺激された自分を感じた。それは、私だけではないらしく、大会に参加した同輩たちも私と同じように、早速、数冊の文献を購入し読みあさったことであつた。このカンファレンスの今後の展開に期待したい。

国内トピックス

1) 2005 日韓友情年記念

楽しんでみよう! 韓国伝承遊び-東京公演と日韓の青少年交流 報告

筒石賢昭 (東京学芸大学)



小学生との交流 附属小金井小学校にて



児童によるパンソリの歌唱

本年(2005)は、日韓国交正常化40周年を迎えた年として、両国政府が定めた「日韓友情年」である。本公演は、次世代を担う若者をはじめとし、日韓両国の友情と相互理解を更に深める為に行なわれた。実行委員長は平山郁夫東京芸術大学学長があたった。本公演は、外務省が認定した交流事業のひとつであり、ソウル教育大学校、東京学芸大学等主催、日本音楽教育学会等後援、サムソン、韓国著作権協会協賛により11月25日(金)と26日(土)に東京学芸大学附属小金井小学校、東京学芸大学芸術館ホール、東京韓国学校、駐日本韓国大使館 韓国文化院の4会場で行われ、交流参加者及び公演の聴衆は延べ1000名を越えたイベントであった。

この公演の目的は、

- 1) 日本の人たちに、韓国伝承遊び歌の紹介を通じて韓国固有文化の美しさとすばらしさを体験してもらう。
 - 2) 韓国の青少年の大学や小学校への訪問を通じて、日本文化と伝統に触れる有意義な機会を持たせる。
 - 3) 特に次世代の主役である、日韓青少年間の伝統文化体験及び交流を通じて、両国の明るい未来へむけての友好促進に寄与しようとする。
- ことであった。

韓国側は、韓国幼・初等音楽教育学会会長でソウル教育大学校教授ChoHio-Ihm 博士が団長

を務め、韓国民俗児童音楽研究院(所長:キム スッキョン)、ソウル特別市学生教育院(院長:キ チョン)等の企画による実際の遊びなど大学生や、児童、保護者、教師等31名による様々な韓国の伝統遊び・音楽公演であり、現在の韓国の伝統音楽やわらべうたの研究の意気込みが感じられるイベントであった。またパフォーマンズも質が高く児童のパンソリも学術的に見ても貴重なものであった。なお日本側の歓迎演奏として、25日は雅楽研究家で学芸大学助教授遠藤徹顧問・指導による雅楽「平調音取」「越天楽」、26日は箏曲「赤壁賦」(中能島欣一作曲)(箏 学会会員 山田流演奏家山口明子、尺八 筒石賢昭 他)を行い花を添えた。

韓国側のプログラムは、

第1部:韓国の伝統遊び歌と音楽の公演

1) みんなで遊ぼう!(ストーリーのある伝統遊び歌)

- ①お馬に乗った大将
- ②どこまで行くかい?
- ③ オグマ・チョグマ
- ④ ハムバク・チョクパク
- ⑤ヨンジョン子守唄
- ⑥この街あの街
- ⑦ライラ

2) パンソリ独唱(昨年度韓国コンクール優勝者):①「春香伝」からサランガ(愛の歌)、②珍島アリラン(韓国民謡)

3) カヤグム散調独奏

4) タルチュム(仮面劇):「固城五広大」より「基本の舞」

第2部：韓国の伝統遊び体験広場では、参加者が面白くて楽しい韓国伝統遊び：

- ① ユンノリ（韓国版すごろく）② 金の紐でお願いごと
- ③ チェギ蹴り（韓国版リフティング）④ カンガンスルレ等を体験した。

フィナーレとして「みんなで歌おうー友情は国境を越えて」で、韓国「故郷の春」日本「ふるさと」を合唱して散会した。

おわりに今回のイベントを出発点として次年

度も国際学術プロジェクト研究として理論と実践の両面で交流を続けていくことを確認した。

なおプロジェクト研究の中間報告として「韓国の伝統遊び歌」の理論編と楽譜編の2冊を学芸大学の紀要で刊行し、若干残部がありますので

関心のお持ちの方は、筒石 (takeshik@u-gakugei.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

2) 仙台市立南材木町小学校

「音楽教育自主公開研究会」報告

嶋田由美（和歌山大学）



「南材木町小学校公開研究会」の発表会風景

去る11月2日、宮城県仙台市立南材木町小学校において、「いいね その声 その音 その笑顔 ～子どもたちが音楽を楽しみながら力を付けていく授業づくり～」と題した「音楽教育自主公開研究会」が開催された。この研究会は同校としては50年ぶりの自主開催の音楽教育公開研究会であり、当日は宮城県内各地はもとより北は青森、南は九州からも合わせて約400名の参加者があったと聞く。一公立小学校の音楽教育研究会にこれだけの参加者が集ったことに、同校での音楽教育実践に寄せる各方面からの強い関心が感じられる。その背景として、一つには、同校が平成15年度から2年間に亘って国立教育政策研究所の指定校であったこと、もう一つには、戦前から「音楽の南材」と言われてきたような音楽教育の伝統校としての知名

度が挙げられるであろう。そこで、本稿では南材の音楽教育の歴史に触れつつ、この自主公開研究会について報告を行いたい。

南材木町小学校の音楽（唱歌）教育の歴史は古く、昭和9年の児童唱歌コンクールで女子の部が全国優勝したことにまで遡れる。その後も、同コンクールにおいて3年連続優勝を果たしたことなどにより、戦前には既に「音楽の南材」としてその名が全国に轟いており、全国的な規模で関心の的となっていたようである。例えば福井直秋も昭和14年の仙台市における講演の中で、それまでに南材木町小学校の授業を参観したり、同校で講演をしたことに触れながら、南材が中心となったこの地方全体の音楽教育のレベルの高さを頌えていた。

このような戦前からの実績、さらには終戦後の全国児童唱歌コンクールでの活躍から、南材

は昭和27年度には文部省の音楽科実験学校に指定され、3年間に亘っていわゆる「頭声発声の研究」を行った。その成果が昭和31年に『音楽科実験学校の研究報告(2)』として刊行されたが、この報告書に子どもの歌声を録音したEPレコードが添付されたことにより、南材木町小学校の歌声は、その後の学校音楽教育の歌声作りの一つの指針となった。

今回の南材木町小学校の音楽研究会は、この実験学校としての「頭声発声の研究」終了年からちょうど50年目の節目に当る年に開催されたものである。同時に、同校では平成15年度から国政研の指定を受けて「全国的かつ総合的な学力調査に係る研究」に音楽科として取り組んできており、その成果は、次期学習指導要領の改訂にも反映されるものである。こうした色々な側面から当日の研究会は大いに期待され、全国的な規模で関心が持たれたものであった。

さて、当日は、「頭声発声の研究」を推進した「音楽の南材」の伝統を引き継ぎ、音楽集会から研究会が開始されたが、その自然で無理のない、透明感溢れる歌声を聴いて、伝統に裏付けられた指導の成果に驚いたのは筆者だけではなかったであろう。何より感心したのは、全校的な歌声づくりが教師主導型ではなく、上級生の歌声をまねるという形で行われていることである。同校では、音楽委員会の児童が中心となって「うたごえタイム」や「音楽集会」の折などに、歌うことの楽しさと「柔らかい歌声」の出し方を全校児童に伝えるという活動が以前から行われて来ている。ここにも「頭声発声の研究」以来の、教師の発声ではなく、仲間の良い歌声をまねるという伝統が息づいているのを感じた。

公開授業は、全学年がIとIIの枠組みに分かれ同時進行されたので、残念ながら全学年の授業を参観することはできなかった。しかし、参観できたどの学年の授業からも、音楽専科をおかず音楽主任を中心とした研究グループで研究を推進し、クラス担任がじっくり子どもの声に向かい合いながら音楽の授業を行うという趣旨が良く反映された指導が見られた。とりわけ、4学年で教員歴4年目の若い教諭が行ったパー

トナーソング（「フレール・ジャック」と「三匹のねずみ」）を使った輪唱指導は、最終的には八部のハーモニーを作るものであったが、その響きのある歌声は、南材における低学年からのゆったりとしたお互いの声を聴きあえる歌声づくりの成果を如実に著わすものであった。

こうした優れた授業実践の裏には、当日の記念講演で文科省の高須一調査官も触れられたような、同校教職員の真摯な研究姿勢があったことは当然であるが、筆者は、より具体的な問題として、先生方の声そのものの上手な使い方が、授業だけではなくクラス作りにも大変有効に作用しているという印象を持った。授業の中で教師は、必要以上の音量の声を使わないことが特別に意識されることなくできているように見受けられた。一方、子ども達も低学年の間から、自分の意見を発表する際にはクラスの全員に伝わるちょうど良い声量で、かつ明確な発音で発表する術を心得ているようであった。それが、お互いの声に耳を傾ける、ひいては仲間の声を聴き合うという音楽の授業の基本的姿勢にも繋がっているのであろう。しばしば見られる教師の指示的な大声ばかりが響き渡る音楽教室とは、全く異なる環境である。こうした声の使い方についても多くの示唆を得ることができた研究会であった。

勿論、これまで南材木町小学校が作ってきた歌声では扱えきれない歌唱教材に対してはどのように指導されているのかという疑問も生じるであろう。多様な音楽の扱い、そして曲種に応じた発声が求められる今日、南材木町小学校が伝統的に作ってきた頭声発声的なものは、そのほんの一部分に過ぎないのではないかという声も聞かれるかも知れない。

しかし、南材木町小学校では、戦前から受け継いできたものにだけ固執するのではなく、しかし、伝統の良い面を一層、有意義に指導に生かしていこうという姿勢で音楽教育に臨んでいるように見受けられた。むしろ、本校ではこの伝統を立脚点としてそこを忽せにせず、確信を持ってやっていこうという南材木町小学校の信念さえ感じられた一日であった。

音楽授業削減問題によせて
教員養成大学（アメリカ）での取り組み

近藤真子（オークランド大学）

岡山大学の奥忍先生からメールを頂いた。音楽授業削減に対する署名運動の立ち上げに関するものだった。アメリカの大学での私の経験がこれからの音楽授業存続へ役立つかどうかは分からないが、あくまでも参考ということで、オークランド大学の授業での体験をご紹介します。

大学の必須授業の中に、音楽に対す哲学者達の考えを学ぶ授業がある。「音楽哲学」の授業である。このコースでの一連の課題の中で、前半は、諸哲学を分析・考察する課題。後半では（１）自分の音楽教育哲学を打ち立てまとめる。という課題と、もう一つは、（２）音楽の授業を学校教育の重要科目だと主張し確固たる地位を獲得するための演説をする。というグループプロジェクトがある。今回紹介したいのはこの後半の２つの課題である。まず、（１）では、自分なりのしっかりした哲学、理念をもつこと。これが、しっかりしていないと今後、遭遇するであろうあらゆる局面に対処できない。音楽教育者としてこれからの長い人生を生きて行こうとするための第一歩である。（２）は、音楽の授業が学校教育から削減されようとする設定で行う。音楽教師仲間のグループが学校長、教育委員会、父兄、社会をパシュエードする実践的シミュレーション学習である。グループごとに哲学、美的価値、心理学等あらゆる角度から、音楽が人間の生活、成長に不可欠であること、学校教育に不可欠であるということを主張するのである。目的は、学校教育の中から消滅しそうな音楽の授業を存続させるために、聞いている人（この場合クラスのメンバーであるが）音楽の授業に対して否定的な立場の人々の考えを覆し、音楽が学校教育で最も大切な教科の一つであるような思いにさせなくてはならない。哲学者、心理学者、教育者達の言葉を引用したり、

社会の新聞の記事、メディアを利用したり、音楽療法からの切り込み、子ども達からの生の声を紹介したりと、グループごとに工夫される。例えば、“音楽とはあなたにとってなんですか？” “もし、この世に音楽がなくなったらどう思いますか？” というような質問に答える子ども達の姿をビデオに撮って紹介したり、自分自身の体験をストーリーとして紹介したりする。時には、自分の生活や過去の経験や感動を紹介しているうちに真極まって涙する生徒もでてくるほどである。どのグループも、あらゆる角度からの、４、５段階のサポート材料を用意し、音楽の重要性を説き、聞いている者の心を動かして行くのである。いかにもアメリカらしいといえ、それまでであろうが、しかし、音楽はやっぱり音楽。我々が愛する音楽であり、音楽のよきは、世界中どこでも通ずるものがあると思う。こういった一連の課題活動は、実社会に出たときに、音楽教育者のプロとして生きる上で必ずプラスになって行くことだと思う。

もしかしたら、私が知らないだけで、日本の大学でも、既にこういった授業活動は行われているのかもしれない。しかし、今回この中央教育審議会での審議内容とその波紋の中で、私自身が立ち返ったところが、オークランド大学のこの音楽哲学の授業の中で、私が自分なりに掲げた「私の音楽教育理念・哲学」であり、グループプロジェクトで行った「音楽が、学校教育や人間形成に不可欠である。」との主張。その一つ一つの内容、そこへ行きつくまでの、音楽教育者としての“思い”や“気持ちの高ぶり”だったのである。あの当時の大学での体験が、今になって非常にありがたかったという思いから、一言筆をとらせて頂いた。

<訂正>

音楽教育実践ジャーナル誌 vol.3 no.1 (通巻5号) の訂正について

編集委員会委員長 木村次宏

音楽教育実践ジャーナル誌 vol.3 no.1 (通巻5号) について、下記の箇所に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

訂正箇所	誤	正
p.24 の最初の吹き出しの 5行目	... RQ1, RQ2, <u>RQ3</u> , RQ5 の4つ	... RQ1, RQ2, <u>RQ4</u> , RQ5 の 4つ
p.24 の黒い楕円の部分	<u>RQ 3</u> : そうかもしれない	<u>RQ 4</u> : そうかもしれない
p.24 の二つめの吹き出し 一行目	<u>RQ 3</u>	<u>RQ 4</u>
p.24 の 2 つ目の吹き出し の 3 行目	... 三つ目は <u>RQ3</u> と未解決 の RQ1 を合体...	... 三つ目は <u>仮説が支持され た RQ4</u> と未解決の RQ1 を合 体...

学会事務局についてのお知らせ

学会事務局を主に担当していただいていた滝浦典子さんが、一身上のご都合で12月14日をもって退職されました。たまっていた業務の整理などもしていただき、膨大で煩雑な業務をこなしながらいつも笑顔で対応していただいたことに、心から感謝申し上げます。



滝浦さんの辞職に伴い、事務局は当分の間何人かのアルバイトで運営されていくことになります。小山事務局長をはじめ、常任理事・理事の先生方、各委員会の先生方には多大なお力添えをいただかなければなりません。

会員の皆様にはご不便をおかけすることになると思いますが、何卒ご容赦くださいますよう、また学会運営にご協力いただきますよう、どうかよろしく願い申し上げます。

会長 坪能 由紀子

編集後記

教育課程審議会 で新しい教育課程に向けての審議がはじまり、音楽科の位置づけについても何かと話題にのぼるこの頃です。この学会が音楽教育の専門家の集まりとして、これからのわが国の音楽教育のあり方に向けて何を発信していくことができるかが、これまで以上に問われていると言えるでしょう。

このような状況の中で開かれた琉球大学での第36回全国大会ならびに妙高での第8回音楽教育ゼミナールでは、新しい息吹を感じさせる熱のこもった発表、討議が続きました。それぞれの内容については、学会誌やゼミナール報告書において報告されますが、このニュースレターでは写真による会場風景も含めて全体の概要や雰囲気会員にお伝えしています。また、海外からはカナダ、アメリカ、中国における実践研究の動向について、興味深いレポート3本を「海外トピックス」として掲載しました。この他、「会員の窓」にも海外在住の会員からの情報が寄せられています。「国内トピックス」の記事については、今号の編集担当である私の至らなから、一日二日で書いていただくというひどいお願いをしたにも関わらず、貴重な情報をお寄せいただきました。

前号の編集後記での「広く音楽教育に関する情報を交換するという意味では、もっともっと会員の皆様方からホットな情報がほしい」というお願いに早速応えていただき嬉しく思います。音楽のすばらしさ、大切さを広く社会に向けて発信していくような情報を、ニュースレターにこれからも多数お寄せくださいますようお願いいたします。
(加藤富美子)

今年の秋は冷え込むことが少なかったため、紅葉があまり美しくありませんでした。この10年の内に日本全土に広がって植樹されたアメリカ花水木も、いつもの赤褐色の紅葉震わせることなく、枯葉が落ちていました。いつもの散歩道を歩きながら燃えることなかった落葉にちょっと心痛みます。けれども、不思議なことにここかしこ立派に紅葉している花水木もありました。よくよく観察してみると、何と北向きの日当たりの悪い方の木の葉が紅葉しているのです。おそらく日が当たらないだけに冷え込んでいるのでしょう。何だかとても嬉しくなりました。

(村尾忠廣)



【日本音楽教育学会役員（2005-2007年度）】

会長：坪能由紀子 副会長：岩崎洋一・加藤富美子

常任理事：小山真紀（事務局長）、佐野 靖・村尾忠廣（総務）

阪井 恵・島崎篤子・降矢美彌子（企画）今川恭子・奥 忍（会計）

岩井正浩（編集委員）

理事：寺田貴雄（北海道）、宮野モモ子・井口 太・熊木真美子・山本文茂（関東）

小川昌文・篠原秀夫（北陸）、南 曜子（東海）

安田 寛・嶋田由美・若尾 裕（近畿）、小川容子（中国）、田邊 隆（四国）

木村次宏（九州）

【事務局住所】 ☎ 184-0015 東京都小金井市貫井北町 2-5-22 ハイッシーダ 1-102

【私 書 箱】 ☎ 184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26

Tel/Fax : 042-381-3562 e-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmes2/index.html>